

まじざわみどり 住宅情報関連誌の制作・編集を経験後、89年より求人情報誌の編集に従事。98年より現職。「体汗快感」手に「職」といった働く価値観の変化を実感しつつ、若者はもろろんのこと、女性、ホワイトカラーにも有益な情報提供を目指している。

「時代は変わっても、 職人」は不滅です

「職人って感じ」「カッコよさそう」「自分の力(腕)で生活を立てることができたらスゴいこと。そいつのに憧れる」「手に職をもつ仕事に就きたい」……

これは8月に行われた高校生向けイベント「進学ワケウクライフ2001」(リクルート主催)で、ガテンな仕事をしてみたいかとの質問に対する回答の一例だ。『ガテン』は10年前に大きな社会問題を抱えて創刊した。当時、現業職・職人などのガテン職は、3K(きつい、きたない、危険)と呼ばれる若者のさらう職種としてメスミで報じられていた。バブル崩壊の直前で、確かに、土木建築業、運輸業、製造業などは、人手不足、とりわけ若年労働者の不足による労働者の高齢化に苦しんでいた。そんな中での創刊である。より多くの職業を紹介し、若者に興味や関心をもってほしい。そして、その興味関心をバックアップする先生、親、そしてメスミに、ガテン職の働く喜びを正しく伝えることで、3Kイメージを払拭しよう。と志をもって発行してきた。

その結果が、先ほどの回答であり、大工や薦、すし職人などの衣装を着て写真を撮るコスプレコーナーの盛況である。コスプレして楽しそうに写真を撮っている高校生の姿を見て、大命題だったガテン職の3Kイメージ払拭は、完全に成し遂げられたと確信した。

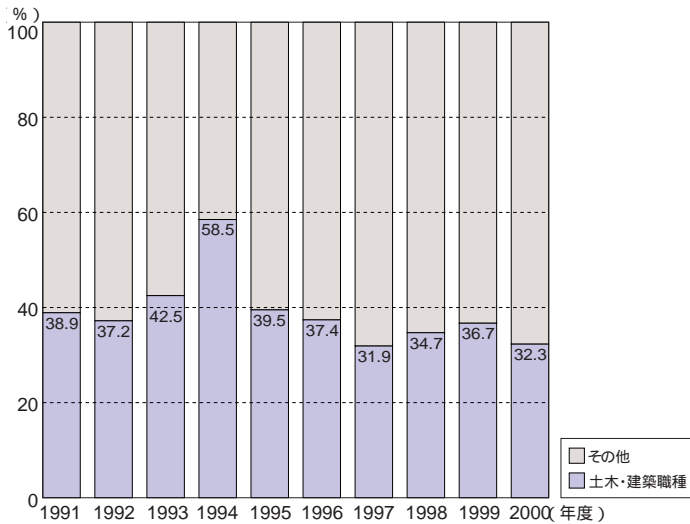
そうはいつても、現業職は恒常的に人材不足の業種であるから、不況になると、雇用の受け皿として注目される。バブル崩壊時は、国家施策として道路、河川、ダム、港湾、鉄道、トンネル……と公共工事を実施することで

雇用を活性化しようとした。有効求人倍率が1を切り、政府が緊急雇用対策本部を設置した1994年度を見てみると、『ガテン』の総求人件数に対する、土木建築職のシェアは、なんと58.5%であった。『ガテン』が「土木建築の本」といわれた所以である。現在は、30%程度であるが、完全失業率5%のこの時期でも対前年比プラスで推移をしている。しかし、内容を見てみると、求人の多い職種は、薦工、鉄筋工、内装工など建築物の躯体や仕上げに関するもの。公共工事の代名詞でもある土木工事職は、94年度には土木建築職全体の9.5%であったものが、99年度では5.7%にすぎないのである。

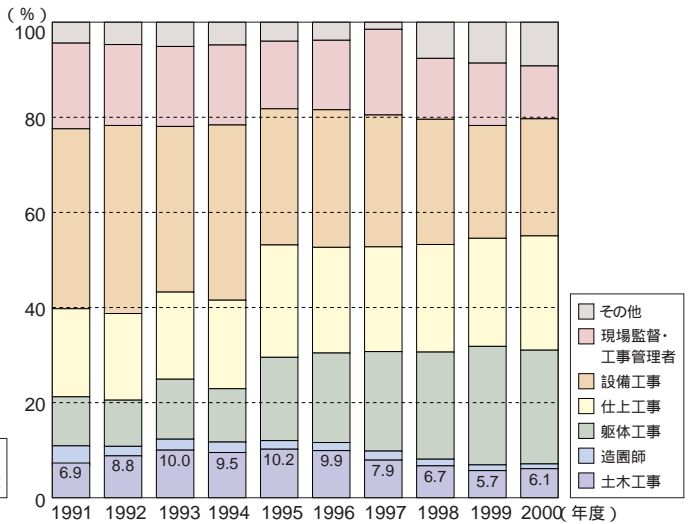
では、土木建築職が対前年プラスで推移しているのはなぜだろうか。

最近、銀座通りを歩いたときに、新しい店舗や、改装した店舗が必ず見受けられる。なおかつ、新店舗出現のサイクルがどんどん早くなっている実感がある。この現象は銀座通りに限ったわけではないはずだ。いかに、ファッションや飲食業をはじめとするサービス業の生き残りが厳しくなってきたかというところだろうか。しかし、これは、企業の健全な競争原理を実現する上では、薦、内装、設備などの建築会社の存在が不可欠である、と読み解くこともできる。繁盛店をつくるなどよい仕事をしたいところには、次々に新しい仕事が舞い込み、忙しくなるといつ構図なのである。公共事業という政府主導の策で一時的に雇用を増やすよりも、健全に土木建築職の求人ニーズが発生する要因がここにあるのではないか。

図表1 ガテン総件数に占める【土木・建築】職種件数シェア



図表2 ガテン【土木・建築】職種件数の内訳



昨年6月に、建設産業人材確保・育成推進協議会に呼ばれ、若者の就業意識と建設産業」というテーマで話す機会をいただいた。そこで、ワークス・マーケットデータ(P.67参照)に基づき求人件数推移について、建築・土木工事業者は、2000年に入ってから、対前年比3〜4割増である」と述べたところ、建設省(現・国土交通省)の方に、建設省でも、ある程度大きな会社を対象に「労働モーター」という調査を行っているが、「12年間くらいは余剰」という結果が出る。小規模の会社に人が足りなくて、ある程度大きな会社に人が余っているというところですね」と言われた。たしかにこちらのマーケットデータは、ひと月1000〜2000件程度のデータではあるが世の中の動向に敏感である規模にかかわらず、いい仕事をしている会社は忙しいのである。

では、いい仕事をするために、ガテン職に求められる能力に変化はないのか。

「サービス」。これは、今やガテン職にも欠かせない能力となった。「ワザ」さえあれば……なんていう職人像はもう古いのである。たとえば、「食」の仕事でも、今の消費者は単においしいものが出てくるだけでは満足しない。サービスもよくて、心地よい雰囲気になって、もちろん味もいい、といったお店が評価されるのであって、働く人にとっては、サービスや調理に関するセンス、感性が大切な要素になる。

また、「メカク」の世界でも、車検制度の変更という規制緩和により大きな構造変化が起きている。K社は、生き残りをかけて、サービスを重視した経営システムを実施し、社長自らがお客様満足最高責任者の肩書をもち、消費者が入りやすくて気軽に利用できる店舗づくりに進化する。社長曰く、これまでは、クルマが好きだからという動機で若い人がクルマの整備の世界に入ってくる傾向でしたが、わかれは人に奉仕するサービス業なのです。

運輸業界でもサービスマインドをもった対応は今後不可

欠だ。現在、輸送手段の9割以上のシェアを占めているトラック輸送だが、年々取り扱回数が増えている宅配便については、貨物追跡サービスや到着時刻予測サービスなど、IT化によるサービスが、どの会社でもすでに始まっている。加えて、ITや電化製品の設置サービスなども求められるようになった。集荷・配送ドライバーに期待されることは、まず最低限、情報機器端末を使いこなすこと。

そして、本当に必要とされるのは、他社と差別化できるほどの高い接客能力なのだろう。これからは運転技術だけの一匹狼的なドライバーは、もう生き残れなくなるのである。

最後に、技術の空洞化が叫ばれている製造について触れておきたい。大田区では、92年に8100あった工場が99年には6000になり、廃業準備車はまだあるといわれているが、モノづくりの本質を追求し、オンラインワンの技術や加工技術を極めたような会社は元気だ。そういう会社は、昔ながらの職人ワザだけに頼るのではなく、ITを駆使しながら、オンラインワン、ナンバーワンの技術を生み出していくのである。

一時、低コスト化のため、工場のライン生産は海外に移ったが、最近、「一人生産」というひとりの担当者が責任をもつてよいものを生産するというしくみが見直されている。また、機械より人の手を介したほうが、低コストで効率的に、「品質なものがつくれる」という場合も実際にある。

いろいろなものがITで置き換わることは間違いないが、ITを超えた手仕事の出現こそが、これからのモノづくりを支えていくだろう。IT感覚を肌で感じて育っている今の若者たちの、新しい発想に期待したい。

今、私の指針としているのは、「どんな時代でも、いわれたとおりのごとをやるのは労働者、そこに少しでも自分の考えを入れて工夫しているのが職人」。高校生や若者の「職人」への憧れを大切に育てていきたいと思っている。